

スクミリンゴガイを利用した除草法の危険性について

スクミリンゴガイはイネを食害する害虫です。1980年代に養殖のため導入された本種が、養殖業廃業などで周辺に逃亡して野生化しました。広島県内では一部沿岸地域で発生しています。

1990年代後半から本種を「稲守貝」や「神の貝」などと称し、発生地で採集し、水田に放飼する除草法が九州各地などで普及しています。

しかしながら、本種未発生地に放すことで、放飼した水田から水路や隣接した水田に分散して生息域を拡大し、本種の被害面積が拡大して問題となっています。本種は野生生物であり、管理することは不可能です。

一旦本種が定着してしまうと、イネに被害が発生し、その被害を抑制するために農薬の散布が必要となります。広島県内で本種の被害を増やさないためにも、未発生地域に放飼する除草法を行ってはいけません。

リンク

ジャンボタニシ除草（農研機構）

<https://www.naro.affrc.go.jp/laboratory/karc/applesnail/other/025030.html>